

小児歯科における定期健診の実施（継続）に影響を及ぼす要因分析

○加藤睦美、島田由紀子、鶴崎直子、松田ちさと
ありた小児矯正歯科医院

【目的】

小児歯科の歯科衛生士にとって、定期健診と必要な予防処置や指導は重要な役割です。一方、最近では夫婦共働きしている家庭の増加、早期からの保育所への入所、子供の塾通いの増加などで、担当歯科衛生士が求める定期健診時間や時期に来院できない場合も増えてきました。そこで、今回、リコール参加者にアンケート調査を行い、子供の日常生活の状況や母親の認識等が定期健診の実施にどのような影響を与えているか、その要因を分析し検討を加えました。

【方法】

H15.2.14～H15.8.14(6ヶ月)に来院した0歳～15歳までの定期健診受診者を対象にしました。アンケートの主な調査項目を1) 課外活動などに費やす時間 2) 通院手段や通院時間 3) 歯科衛生士が提示する健診への評価 4) 母親が期待している健診内容や処置内容 5) 母親の歯科保健行動や勤務の有無などとしました。

【結果】

アンケート回答者数は600名、小児の年齢分布は0～2歳が約10%、3～5歳が約35%、6～11歳が約50%、12歳以上が約5%でした。リコール参加者は①近隣の3中学校区が3分の2を占め、②要通院時間は30分未満が70%、③来院の交通手段は車が約70%、④当院が提示したリコール時間へは無理な場合がある者が約15%で、⑤リコールの希望診査項目は歯列の診査(約35%)が多く、う蝕の診査(約30%)、歯肉・歯周組織の診査(約20%)、口腔機能の診査(約10%)の順番で、⑥健診時の処置希望はう蝕治療(約30%)、フッ素塗布(約25%)、予防充填(約20%)、歯磨き指導(約15%)、口腔機能育成(約5%)の順番でした。⑦課外活動を行っている者は全体では約60%、6歳以上では約85%以上が課外活動を行い、⑧母親の約40%以上が診察時間中に勤務していました。

【考察】

今回の調査により、以下の点が考えられました。

- 1) リコール参加者は、より近くて短時間で来院できることを望んでいる。
- 2) リコールには正常な顎顔面領域の発育の支援の機能が求められている。
- 3) リコールの予約の際に、小児の課外活動などの生活スケジュールと母親の勤務状況などを考慮する必要がある。

永久歯が全顎に亘り短根歯である急性リンパ性白血病患児の一症例

○細矢由美子¹、池田正一²、藤原 卓¹
¹長大院・医歯薬・小児歯、
²神奈川県立こども医療センター歯科

【緒言】小児白血病治療後の歯科的な晩期障害として、歯の形成障害、萌出遅延、顎骨発育不全などが報告されている。今回我々は、幼児期の大量化学療法と骨髄移植に伴う放射線照射が原因で、すべての永久歯に形成障害をきたしたと思われる症例を経験したので報告する。

【症例】平成3年11月18日生、男児。

初診：平成6年5月27日、2歳6か月。

主訴：齲蝕治療（小児科よりの紹介）

全身既往歴：生後10か月時に急性リンパ性白血病を発症。CCLSGの乳児白血病プロトコールによる治療を受け、一旦は完全寛解となった。1歳8か月時に中枢神経系再発をきたし、化学療法の後、1歳11か月時に骨髄移植を受けた。歯科的所見：主訴であるC₁～C₂の齲蝕歯7歯に対してレジン修復処置を行った。以来、3～6か月間隔の定期診査に応じている。乳歯のdf歯数は12であったが、永久歯に齲蝕はない。6歳11か月時撮影の上顎側方歯群のX線所見より、第一小臼歯が矮小で上顎中切歯が短根である事に気づいた。8歳9か月時のパノラマX線所見より、第二小臼歯4歯と第二大臼歯4歯が先天性欠如、第一小臼歯4歯が矮小歯、存在するすべての永久歯が歯根長1/3未満の短根歯である事を確認した。歯根はV字型を呈し、早期より根尖の閉鎖がみられた。9歳1か月時に上顎両側中切歯を脱臼し、上顎4切歯を3か月間wire-resinで固定した。外傷3か月後に、上顎4切歯すべてが歯髄電気診断に+を示した。9歳9か月時に左側側切歯部の反対咬合を上顎床矯正装置により治療した。現在、上顎切歯部に軽度の動揺がみられる。

【考察】幼児期の大量化学療法あるいは放射線療法により歯科的障害が広範囲に及んだ場合には、咬合の維持・管理と回復を目的に、早期よりの正しい診断と的確な治療計画の下での長期管理が必要となる。小児白血病患者の短根歯については、自然脱落例を経験しており、本患児については、固定やインプラント治療も含め、今後の咬合機能をどのように図っていくかが課題である。